かかみがはら
百科+
Kakamigahara Encyclopedia PLUS

60th KAKAMIGAHARA

スマートミュージアム Kakamigahara

かかみがはら 百科プラス 2023 No. 06

令和5年度
各務原市歴史民俗資料館 パネル企画展

戦国の各務原

「昭和初期の伊木山の絵葉書」（個人蔵）と「長久手合戦図屏風」（豊田市蔵・浦野家旧蔵）に描かれた伊木忠次

第１章　戦国時代の各務原の地形

1．多くの城と木曽川の役割

鎌倉時代に起こった承久の乱、戦国時代の織田信長の美濃攻略戦など、戦乱の時代の各務原市域は、しばしば合戦の地となりました。その理由は、各務原の特徴的な地形にあります。

木曽川の北、各務原台地の南には、鵜沼城山、伊木山（写真１）、前渡不動山、三井山などの小高い山が並んでいます。これらの山からは濃尾平野を一望することができ、合戦の際には格好の見張り台になったことが想像できます。また、敵の渡河作戦に対する防衛拠点にも活用されました。城山、伊木山、三井山からは実際に城郭遺構が確認されており、前渡不動山や新加納には合戦において陣が置かれたことが記録に残っています。こうした城郭の連なりが、尾張国側から美濃国に侵攻する軍勢に対しての防衛線となっていたと考えられます。地域全体を一つの城に見立てるならば、木曽川が堀、山々が櫓の役割を果たしていたと言えるでしょう。

木曽川から離れた場所にも、天野山砦、八幡山城などの見晴らしの良い山城があり、近隣の城とのろしなどで連絡を取り合っていたことも考えられます。また野口館や松倉城のような城館も所在しており、美濃と尾張の国境でしたたかに生きる地侍たちの動向も、この地の戦国時代を語る上では重要です（図１）。

写真１　犬山城から伊木山を望む

図１　各務原市域周辺の中世城郭（国土地理院地図をもとに当館作成）

第２章　織田信長の美濃攻略戦と伊木清兵衛忠次

1．東美濃から稲葉山城攻略へ

桶狭間の戦いで今川義元を打ち破った織田信長は、台頭してきた三河の松平元康（後の徳川家康）と同盟を結んで東方の安全を確保した上で、尾張から美濃への侵攻を目指しました。永禄６年（一五六三）、信長は本拠地を清須から小牧に移し、永禄８年（一五六五）、犬山城を攻略しました。

信長は、木曽川を越えて伊木山城を攻め取り、砦を築きます。この砦は、斎藤龍興方の武将が守る鵜沼城、猿啄城（坂祝町）を見渡すことができる攻撃の拠点となりました。この後信長は、猿啄城、加治田城（富加町）、金山城（可児市）などの東美濃の城を次々と手中に収めました。さらに信長は、永禄９年（一五六六）、河野島（川島地域）から稲葉山城を目指しましたが、敗れました。永禄10年（一五六七）４月にも各務野方面から侵攻しましたが、新加納に籠る斎藤方を攻めきれず、退却しました。同年８月、斎藤方の武将を数多く寝返らせることによって、ようやく稲葉山城を攻略しました。

2．伊木清兵衛忠次の活躍

信長の伊木山城攻略に際して活躍したのが、伊木清兵衛忠次（一五四三～一六〇三）です。忠次は、元の名を香川長兵衛といい、尾張清須の生まれです。伊木山城攻めでの功績により「伊木」の名を与えられ、信長の家臣池田恒興に仕えて家老となりました。花隈城の戦い、山崎の戦いでも、池田家を代表する武将として活躍しています。

天正12年（一五八四）、小牧・長久手の戦いにおいて恒興は、羽柴秀吉と徳川家康のどちらに味方するか迷った末、忠次の進言により秀吉に味方しました。しかし恒興は、長久手で戦死してしまいます（資料１）。池田家が危機的状況に陥るなかで忠次は、跡を継いだ恒興の次男輝政をよく補佐し、秀吉から信頼されました。戦後、忠次は秀吉から直々に竹ヶ鼻（羽島市）の領地を与えられるなど、特別な待遇を受けました。

天正18年（一五九〇）、輝政が岐阜城から三河吉田城（愛知県豊橋市）へ移ると、忠次は輝政から田原城（愛知県田原市）を任されました。

資料１　「長久手合戦図屏風」に描かれた伊木忠次（左）と首を取られた池田恒興（右）（豊田市蔵・浦野家旧蔵）

伊木山城

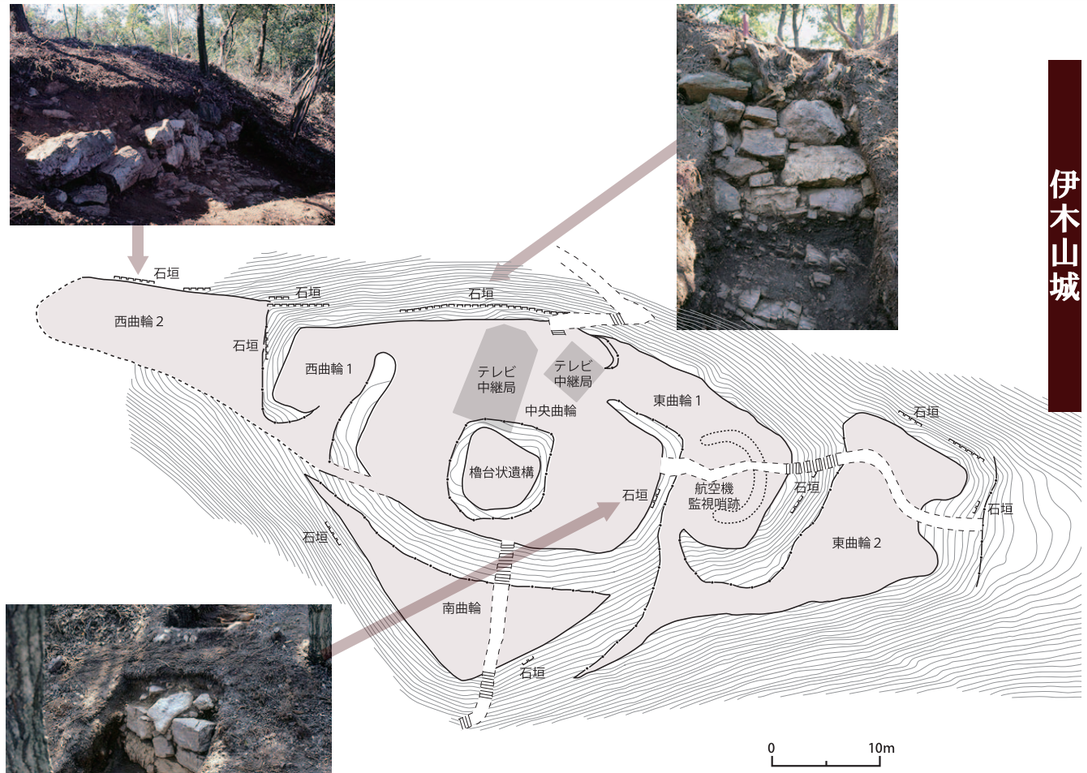


図２　現在の伊木山城跡遺構と発掘調査で確認された石垣

伊木山城の石垣と曲輪

江戸時代に編纂（へんさん）された『美濃雑事記（みのぞうじき）』（資料２）には、伊木山城について「天守台東西六間（10．９ｍ）、南北四間三尺（８．18ｍ）石垣台形今に存在す」とあり、石垣のある城跡として認識されていたことが分かります。伊木山山頂には、現在も曲輪（くるわ）や石垣などの遺構が残っています。

平成12年、22年に発掘調査が行われ、伊木山城が六つの曲輪によって構成されていることが確認されました（図２）。曲輪は、平坦面を広げるために切土と盛土を行っています。また、曲輪の中央には櫓台状の高まりが確認できます。曲輪の北側には広い範囲に石垣が築かれており、盛土の状況から高さ２ｍ以上の石垣であった可能性があります。また、石垣の裏には、「裏込め石」と呼ばれる小さな石が充填されていました。これには石垣内部の排水を円滑に行う役割がありました。織豊期以前で石垣に裏込め石が用いられている美濃国内の城は、現在のところ岐阜城（岐阜市）・大桑城（おおがじょう）（山県市）・伊木山城のみで、当時の先進的な技術が用いられた城であったと言えます。

資料２　『美濃雑事記』

出土遺物はごくわずかですが、16世紀前半とみられる天目茶碗や、16世紀後半とみられるすり鉢が出土しています。

石垣を巡る議論

伊木山城の石垣は、誰が積んだものなのでしょうか。『信長公記』には、信長が「此山へ取上り、御要害丈夫にこしらへ」たとあります。これに従えば、信長が伊木山を攻め取った後に、美濃攻略の拠点として活用するために築いたものであると言えます。しかし、短期的に布陣するために築く陣城に、信長が石垣を築くことは基本的にありません。美濃の斎藤氏が、尾張からの侵攻を防ぐために元々石垣を築いていた可能性もあります。

3．忠次と忠繁の城普請

慶長５年（一六〇〇）、関ヶ原の戦いにおいて、池田輝政は徳川家康に味方します。輝政は東海道を進む東軍の主力として活躍し、伊木忠次は池田隊の中で先鋒を務めました。

関ヶ原の戦いは東軍の勝利に終わり、輝政は家康から播磨（はりまのくに）国を与えられ、忠次は三木城を任されました。慶長８年（一六〇三）、忠次は三木城で没しました。墓は、兵庫県三木市の本要寺にあります（写真２）。

伊木忠次の息子忠繁（一五八一～一六一六）は、慶長６年、姫路城（写真３）の普請奉行に任ぜられ、縄張りを行いました。これには、存命の忠次のサポートがあったと考えられます。忠次没後、忠繁は跡を継いで池田家の家老となりました。その後、忠繁は池田家中の築城担当となり、江戸幕府が全国の大名に城普請を命じた「天下普請」に携わりました。江戸城、駿府城、篠山城、名古屋城などの普請に、池田家を代表して参加しています。慶長19年（一六一四）の大坂の陣には、名古屋城普請から直接参陣し、家康から「仕寄（しよせ）」（城を攻撃する側の陣地）が見事であると褒められています。忠繁は元和２年（一六一六）に没し、墓は三木市の正入寺にあります。

写真２　伊木忠次の墓（三木市本要寺）

写真３　姫路城

4．徳川大坂城東六甲採石場

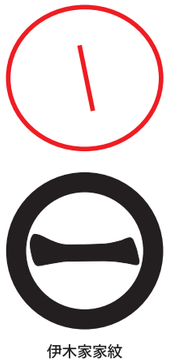
元和６年（一六二〇）、江戸幕府は大坂の陣で焼け落ちた大坂城を天下普請で再建することを決め、池田家も石材集めを担当しました。「徳川大坂城東六甲採石場」は、兵庫県神戸市東灘区から西宮市にかけての採石場であり、担当した武将の家紋などが、当時運ばれず残された石に刻印されています。刻印は、全国の大名が採石場の持ち場の範囲を示すために刻んだものであると考えられています。

兵庫県芦屋市の「岩ケ平（いわがひら）刻印群」では、伊木家の家紋である「丸に一文字」が入った石や（写真４）、「伊木三十郎ニしノミや内石ば」と名前が刻まれた石（写真５）が確認できます。「伊木三十郎」とは、忠繁の息子である忠貞（一六一二～一六七二）のことです。当時の忠貞は幼少でしたので、築城技術に長けた伊木家家臣が幼い主君を支え、石材集めに従事していたと想像できます。

伊木家は岡山藩家老として、虫明（むしあげ）（瀬戸内市）に３万３０００石を与えられ、幕末まで存続しました。

写真５　「伊木三十郎」の刻印
（芦屋市教育委員会提供）

写真４　岩ヶ平刻印群の石に刻まれた家紋（赤枠内）
徳川大坂城東六甲採石場（芦屋市）



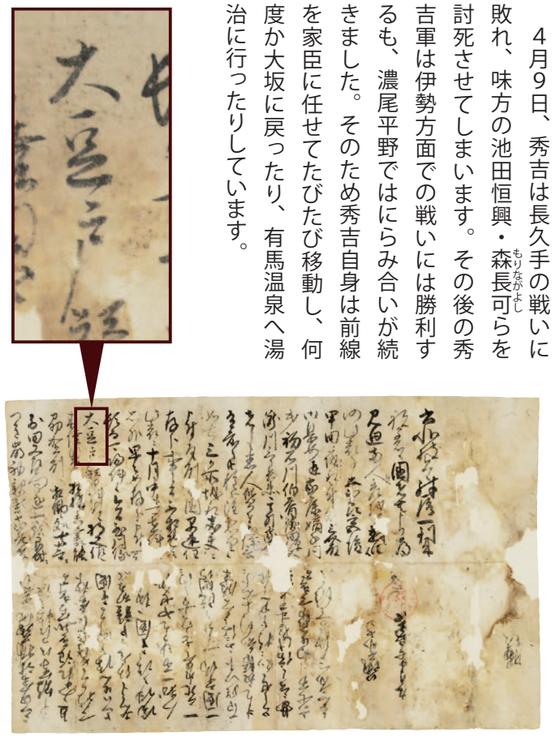
伊木家家紋

第３章　小牧・長久手の戦いと各務原

1. 秀吉の大豆戸布陣

羽柴秀吉と徳川家康・織田信雄連合軍との戦いは、「小牧・長久手の戦い」と呼ばれ、天正12年（一五八四）の3月から11月にかけての長期戦でした。この戦いにおいて秀吉は、木曽川を重要視していました。秀吉は池田恒興に、美濃金山から犬山の間に船を集めさせ、水運を掌握します。そして鵜沼と犬山の渡しに軍勢を置いて、前線へ物資を輸送させていました。

4月9日、秀吉は長久手の戦いに敗れ、味方の池田恒興・森長可（もりながよし）らを討死させてしまいます。その後の秀吉軍は伊勢方面での戦いには勝利するも、濃尾平野ではにらみ合いが続きました。そのため秀吉自身は前線を家臣に任せてたびたび移動し、何度か大坂に戻ったり、有馬温泉へ湯治に行ったりしています。



資料３　羽柴秀吉朱印状（たつの市立龍野歴史文化資料館画像提供）

資料３は、羽柴秀吉から伊賀にいる家臣、脇坂安治に宛てた朱印状です。日付は9月17日、内容から天正12年（一五八四）のものであると推定されます。

文書の内容は、徳川家康や織田信雄との交渉内容、軍勢の配置状況、各地の合戦での勝利などが記されています。「今日は川縁の大豆戸（まめど）に陣を移した」という記述もあります。大豆戸とは現各務原市前渡（まえど）のことです。

大豆戸には、矢熊山（前渡不動山）という見張り台としては申し分ない山があります。現在も山頂からは、小牧山を含め濃尾平野を一望することができます（写真6）。秀吉が小牧・長久手の戦いの中で陣を張った場所は、岐阜、鵜沼、犬山、楽田などです。いずれも濃尾平野が一望できる城や山、人家が多く集まる城下町や川湊（かわみなと）があります。敵に急襲されないよう見張り台を確保でき、武将たちの宿所が得られる地点に陣を張っていたと言えます。見張り台となる山があり、木曽川の渡し場でもあった大豆戸は、秀吉が陣を張るにふさわしい場所であったと思われます。

秀吉布陣の363年前、承久の乱において、後鳥羽上皇に味方する京方軍が木曽川を防衛線として大豆戸に布陣していることからも、この地の戦略的重要性がうかがえます。

資料３の朱印状を含む「龍野神社旧蔵文書」は、二〇一四年に兵庫県たつの市が旧蔵者から購入し、東京大学史料編纂所により修理が行われ、公開されたばかりの古文書群です。今後も全国各地で発見された古文書から、各務原に関わる情報が得られる可能性もあります。

写真６　前渡不動山から小牧山を南に望む

2. 坪内氏の戦国時代

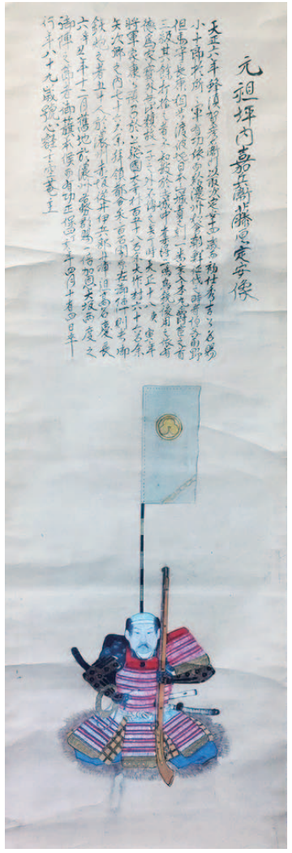
由緒書によると坪内氏は、先祖を藤原鎌足に発する富樫（とがし）氏の流れを汲む一族であると称しています。歌舞伎の『勧進帳』で有名な富樫左衛門を先祖とし、戦国時代に一族が松倉（各務原市川島松倉町）に住み、名を坪内に改めたことが坪内氏の始まりであるとされています。

坪内利定（一五三九～一六一〇）は織田信長に仕え、信長の美濃攻略にあたっては秀吉と共に案内役となりました。「坪内文書」には、永禄8年（一五六五）の信長や秀吉からの知行宛行状や、鉄砲での狩猟を許可するといった内容のものが含まれており、坪内氏への期待がうかがえます（資料4）。その後も利定は、鉄砲隊を率い、自らも鉄砲を撃って、浅井氏、本願寺、武田氏との戦い等で活躍しました。

小牧・長久手の戦いの際、利定は秀吉方の森長可に従って戦いましたが、息子家定は家康に味方して小折城（江南市）に入りました。親子で敵味方に分かれた坪内氏は、秀吉と家康の間で揺れる濃尾国境地帯の武士団を象徴する存在です。

家康が関東に移封となった際、坪内氏は一族で家康に従い、利定とその息子、家定・定安（資料5）・正定・安定は、武蔵国・上総国合わせて3400石の領地を与えられました。関ヶ原の戦いにおいては、井伊直政隊に属して息子4人と共に鉄砲隊50人を率いて活躍し（資料6）、親子5人合わせて各務郡・羽栗郡に653石の領地を与えられ、旗本となりました。

坪内氏がどのように鉄砲を集め、鉄砲隊を率いる一族となったのかは定かではありません。由緒には、利定が播磨での合戦において伊賀・甲賀・根来（ねごろ）の鉄砲隊を率いていたことが記されています。坪内氏が木曽川の水運を活用して近畿地方など各地と交流を持ち、鉄砲を入手していたとも考えられます。



資料５　坪内定安肖像画（個人蔵）

資料４　織田信長判物（東京大学史料編纂所所蔵影写本）

資料６　井伊直政隊に属し、首を持ち帰る坪内利定
（関ヶ原合戦図（井伊家伝来資料）（部分）　彦根城博物館所蔵　画像提供：彦根城博物館 /DNPartcom）

第４章　関ヶ原の戦い前哨戦「米野・新加納の戦い」

1．清須軍議

慶長５年（一六〇〇）７月、徳川家康および東海道の大名を中心とする軍勢（東軍）は、上杉景勝を討つため会津に向かっていました。しかし、石田三成が京都で挙兵した情報を受け、家康は福島正則・池田輝政らの軍勢を尾張国に急行させ、自身は江戸に戻りました。８月19日、福島・池田らの軍勢が清須に集結しているところに、江戸にいる家康からの使者が到着し、岐阜城攻撃の命令が伝えられます。池田・福島らは、本多忠勝・井伊直政らを交えて軍議を開き、軍勢の振り分けを行いました。福島は清須城主、池田は元岐阜城主であり、渡河戦において船の手配や浅瀬の案内が可能でした。

福島正則が率いる軍勢（福島軍）は清須から西に向かい、木曽川下流の萩原・起（一宮市）で渡河し、竹ヶ鼻城（羽島市）を攻略してから岐阜城に向かうことになりました。また池田輝政が率いる軍勢（池田軍）は清須からまっすぐ北に向かい、河田（川島河田町）で渡河し、岐阜城を目指すことに決まりました（図３）。

対する石田三成に味方する軍勢（西軍）の主将は、岐阜城主織田秀信です。秀信配下の武将たちが約２０００人の軍勢で米野（笠松町）や新加納に布陣しました。なお秀信自身は、川手村閻魔堂（岐阜市）まで出陣しましたが、直接戦闘には加わりませんでした。

図３　慶長5年8月22日、尾張国・美濃国における関ヶ原の戦い前哨戦の布陣

所有者の意向により画像を非表示にしています

資料７　関ヶ原合戦絵巻（小野市立好古館所蔵）
一柳直盛の、木曽川越の戦いでの活躍を描く。小野藩三代藩主一柳末礼（1649 ～ 1712）の時代に作成されたと伝わる。

2．米野・新加納の戦い

８月22日、池田軍が河田で木曽川を渡り、川岸の米野で待ち構える西軍に攻め込みました。黒田城（一宮市）の城主である一柳直盛が渡河の先鋒を務めて活躍しましたが、難しい渡河攻撃であり、大きな被害を出しました（資料７・図４）。

米野の西軍を打ち破り、木曽川を越えた池田軍は、家老伊木忠次を先鋒に、西軍の守る新加納砦に攻め込みます。西軍は砦を守り切れず岐阜城へ向けて退却し、閻魔堂の織田秀信も退却しました（図５）。池田軍は逃げる西軍に追い打ちをかけ、岐阜の町際まで攻め込み、約５００人を討ち取りました。福島軍も竹ヶ鼻城を落とし、22日の戦いは東軍の勝利に終わりました。池田・福島軍は、渡河戦で疲労していたこともあって、その日のうちに岐阜城に攻め込むことはせず、芋島（岐阜市）・平島（岐南町）・北方（一宮市）などに布陣し夜を明かしました。

翌８月23日、東軍は岐阜城を攻め落としました。この勝利を受け、江戸にとどまっていた徳川家康は出陣し、９月13日には美濃国に到達。15日の関ヶ原での決戦を迎えます。

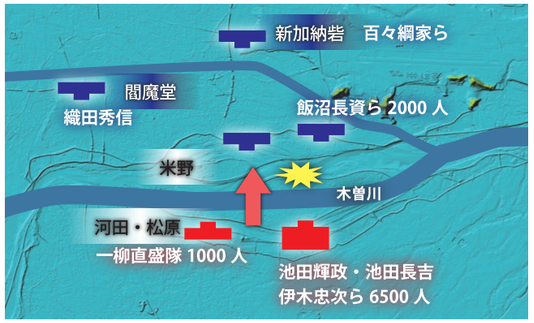


図４　一柳隊を先鋒に木曽川を渡河し、西軍を攻撃

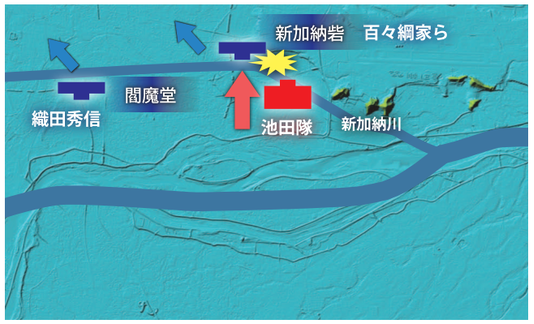


図５　池田隊が新加納砦を攻撃し、西軍は敗走

3．当事者たちの「新加納合戦」

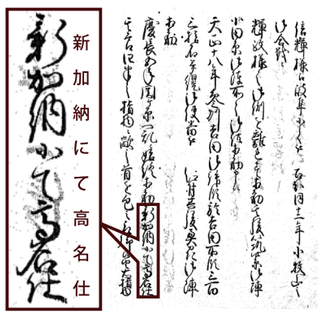
現在、この東軍が木曽川を渡河した戦いは「米野の戦い」として知られています（写真７）。では、当時の人々は、この戦いをどのように認識していたのでしょうか。

慶長５年８月26日、江戸にいた徳川家康に、この戦いの勝報が届けられます。同29日、家康が越後の堀秀治に宛てた書状には、池田が「しんか野（新加納）」の敵を撃退し、岐阜城まで追い込んだことが記されています。

また、江戸時代に池田家が藩主を務めた岡山藩・鳥取藩の藩士の家譜（家の系譜を記した文書）では、池田家家臣たちは、この合戦を「新加納合戦」と呼んでいます。新加納川を越えて戦ったこと、新加納村に砦が築かれていたこと、戦いで多くの敵の首を取ったことなどが記されています（資料８）。

池田家家臣たちは元々美濃に領地を持っていた者も多く、勝手知った土地「新加納」で大いに戦果をあげました。一方、９月15日の関ヶ原での本戦において、池田隊は南宮山の毛利隊に対抗する抑えの役割であったため、華々しい武功はありませんでした。このため、池田家家臣たちにとって新加納の戦いこそが、最も軍功を誇示できる戦いでした。よって池田家家臣は家譜に「新加納合戦」での活躍を、皆こぞって記したのです。

写真７　米野の戦い跡



資料８　鳥取藩士乾平右衛門家譜
（とっとりデジタルコレクション）

徳山秀現の戦国時代

鉄砲隊を率いて活躍した坪内氏、渡河戦や築城で名を馳せた伊木氏などとは対照的に、政務や人脈を買われて戦国時代を生き抜いたのが、旗本徳山氏の初代、徳山五兵衛秀現（則秀、一五四四～一六〇六、資料９）です。

秀現は、美濃国大野郡徳山の土豪徳山氏の一族です。初め柴田勝家に仕え、越前での政務に貢献し、加賀国内に城を与えられるなど、柴田家家臣の中心的存在でした。賤ヶ岳の戦いでも柴田方として活動しましたが、羽柴秀吉に敗れて降伏し、秀現は領地を失ってしまいました。

その後秀現は、徳川家臣の石川数正の口添えもあって、加賀の前田利家に仕えることになります。秀現は石川数正の他、本多正信・大久保忠隣ら徳川家の重臣と懇意にしており、親しい関係がうかがえる書状が残っています（資料10）。徳川家としても前田家としても、両家に顔の利く秀現が前田家にいることはパイプ役として有用だと判断されたのでしょう。慶長４年（一五九九）、前田利家は死去の直前、家康に対して嫡子利長の取り立てを願い、誓書を求めていますが、その使者を務めたのが秀現でした。

秀現は利家死去の翌日、前田家を離れ、徳川家臣となります。関ヶ原の戦い後には、旧領の徳山地域に加え各務郡の一部を与えられ、旗本となりました。

旗本徳山氏は本家が大島村・西市場村・山後村など約２０００石および大野郡徳山などに約７００石、分家が野口村・熊田村・島崎村に５００石の知行地を有し、幕末まで存続しました。西市場村に更木陣屋（資料11・写真８）が築かれ、徳山氏による各務郡支配の拠点となりました。

戦国時代以来、徳山谷は美濃と越前を結ぶ重要な山道であり、徳山氏は両国の大名間の連絡役として活躍しました。秀現も徳川家と前田家を結ぶ役割を担い、その褒美として各務郡を与えられたと考えられます。

資料９　徳山秀現肖像画

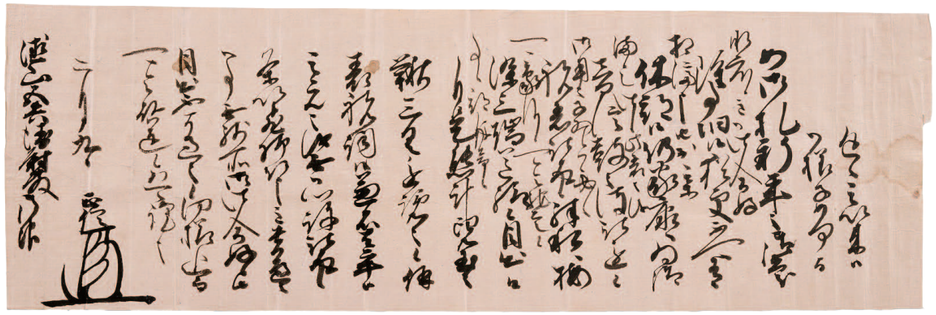
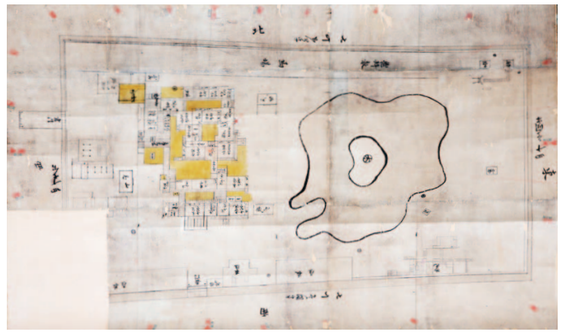

資料10　徳山五兵衛宛本多正信書状（岐阜県歴史資料館蔵）

写真８　旗本徳山陣屋公園


資料11　更木陣屋絵図

4．野口館と安積氏

蘇原野口町に位置する「野口館」は、戦国時代、15世紀後半から16世紀前半にかけて築かれた館です（写真９）。「館」とは、防御機能を備えた武士の屋敷のことで、四辺を土塁と空堀に囲まれ、櫓台のような土盛があります。こうした館は、江戸時代以降は開墾などで破壊されてしまうことが多い中、野口館は非常によく戦国時代の姿を留めています。野口館に代々居住する安積氏が、家の由緒を示すために守ってきたものと思われます。

安積氏は、江戸時代、野口村の庄屋を務めました。その分家は戦国時代、山内一豊に仕えていました。土佐藩士の系図をまとめた「御侍中先祖書系図牒」によると、安積氏の分家は一豊に仕えており、一豊が土佐藩主となる際、土佐に移り住みました。安積氏は土佐藩士として幕末まで存続し、野口村の安積氏当主が早逝した際には、土佐から養子をもらうなど、関係は江戸時代を通して続きました。

「安積家文書」のうち、慶長５年（一六〇〇）８月24日に発給された禁制には、徳川家康の家臣である本多忠勝・井伊直政の名で、「野口村での乱暴狼藉を禁止する」と記されています（資料12）。禁制は、合戦で味方した寺社や村に対して与えられるものです。この前日は、関ヶ原の戦いの前哨戦である岐阜城の戦いがありました。一豊が家康に味方しており、野口村の安積氏も協力的だったため、与えられたと思われます。

野口館と安積家文書は、各務原の戦国時代を知ることができる重要な史料です。

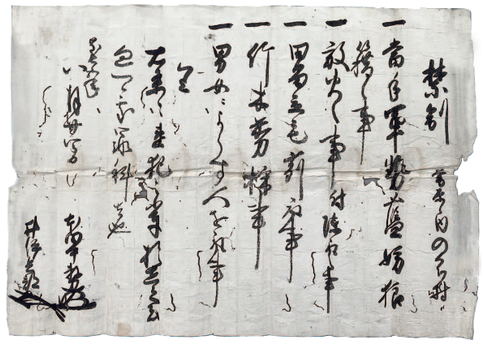

資料12　慶長５年（1600）８月24日　本多忠勝・井伊直政 禁制

写真９　野口館の堀と土塁

5．各務原での「一揆」の正体

岐阜城の戦いの際、西軍の織田秀信の家臣の記録に、岐阜城・「八幡之城」・犬山城の間で一揆が発生し、犬山城との連絡が遮断されたと記されています。「八幡之城」とは、当時「八幡根本寺」と呼ばれていた加佐美神社の裏山にある、八幡山城のことと思われます。つまりこの一揆は、岐阜～蘇原～犬山間、すなわち各務原市域に集結した、東軍に味方する勢力であったと分かります。

蘇原の安積氏は、一族が東軍の山内一豊の家臣になっており、西市場の赤座氏、前渡の片山氏は一族が池田家の家臣になっています。東軍に縁のある各務原の地侍たちが、一揆を率いて西軍を妨害していたのかもしれません。

6．美濃か播磨か

池田家の歴史を記した『池田家履歴略記』によると、徳川家康は関ヶ原の戦いの後、池田輝政に対し、美濃か播磨かどちらか一国を与える旨を提示しました。池田家家臣は皆、旧領である美濃を望みましたが、家老の伊木忠次だけは、美濃を避けるべきと主張します。「天下兵乱に及べば、東西の合戦は多く尾張と美濃の間で起こり、最終的に関東の勢力に制圧されてしまう。子孫代々の発展の基礎とするのは、播磨が良い」という忠次の意見が採用され、池田家は播磨国を拝領しました。

忠次は濃尾平野で、数々の合戦を経験しました。信長の美濃攻略戦では伊木山城攻めで活躍し、小牧・長久手の戦いでは主君恒興を戦死させてしまうという苦い経験をし、関ヶ原の戦いでは木曽川を越えて美濃へ攻め込む先鋒を務めています。忠次が美濃を避け播磨だと主張したのは、各務原市域を含む濃尾平野は「合戦の地」であることを、最もよく知っていたからに他ならないのです。

令和5年度
各務原市歴史民俗資料館パネル企画展
戦国の各務原

会期 令和5年9月2日(土)～10月1日(日)
会場 各務原市立中央図書館3階 展示室B
主催 各務原市教育委員会

発行 各務原市教育委員会
編集 各務原市歴史民俗資料館 〒504-0911 岐阜県各務原市那加門前町3丁目1番地3 市立中央図書館3階 TEL 058-383-1361
スマートミュージアム Kakamigahara